

『美術と人との関わり』 に対する意識調査

～「人」と「人」のつながりと
そのあり方を考えるために～

アンケートの目的と対象者

私は、美術とは、「人間の営みから生まれ出たもの」と考えています。また、美術とは「人間の有り様」を映す鏡であると思っています。私は、「人」と「人」のつながりとそのあり方を考えるとき、「美術」「教育」「人」という三つの要素が同時に問題視されるべきであると思っています。そこで、この調査では、「学校」を「人づくりの原点」である「場」の一つと考え、そこで行った「GO UP A LADDER OF DREAMS! 2006 プロジェクト」が児童・協力者・関係者にとってどのような印象・感想を持たれたのかを検証しました。この検証結果によって、「美術」「図工」という教科の可能性と影響力の大きさを少しでも示していきたいと思ひます。また、プロジェクトへの関わり方が児童／協力者／教職員は異なっています。それを配慮して質問の内容や文章構成なども対象者に応じて以下のように異なっています。

①プロジェクト参加児童

自身の生活の様子、学校という場について、プロジェクトに関する感想と質問。

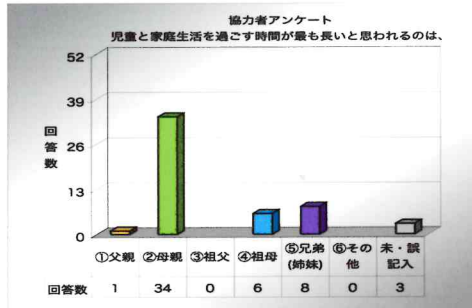
②足掛かりの布協力者

自身の生活の様子、人生観、美術教育に対する感想と質問。

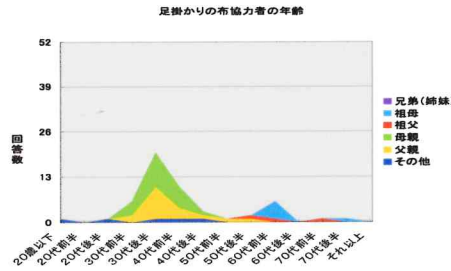
③教職員

自身の生活の様子、人生観、教育観及び美術との関わり、プロジェクトに対する感想と質問。

対象者の年齢は、児童は小学校4年生9歳から10歳、協力者の年齢層は広く20歳から80歳以上までさまざまであった。とくに、子供たちが足掛かりの布を依頼した相手で一番多かったのは「母親」次いで「父親」「祖母」となっています。その他には、「親戚」「伯父」「保育士」等の方が参加して下さいました。つまり、わずかな「その他」の方を除いて、ほとんどの依頼は保護者の方に当てられたものになりました。さらに、注目すべき点は、子供たちの依頼が「母親」に多かった点です。ある男性の先生が夢のはしごをご覧になられてつぶやかれた「やっぱり母親か・・・」という言葉は印象的でした。



しかし、協力者のアンケートからも分かるように「児童と家庭生活を過ごす時間が最も長いと思われるのは」という質問に対し「母親」という回答は約65.5%と高く、次いで「兄弟姉妹」となっています。この結果から、「母親」への感謝の気持ちが「足掛かりの布」に多く記されていた理由が見て取れます。しかし、他の足掛かり依頼では、父親や祖父、祖母にも宛てた者が多くいます。普段は過ごすことが少ないけれど、自分を大切に思っていて支えてくれている人に対し言葉を送ることのできた特別な機会になったようです。学童保育員・母子支援員として勤務している私は、最近の社会情勢で母親のライフワークの多忙さについて懸念し、母親と子供との関係の危うさを感じていました。しかし、子供たちの「母親」に対する信頼の大きさ、愛情を求める気持ちの深さを改めて感じました。



教職員の方々は、20代前半から50代後半の方まで幅広くご回答頂きました。

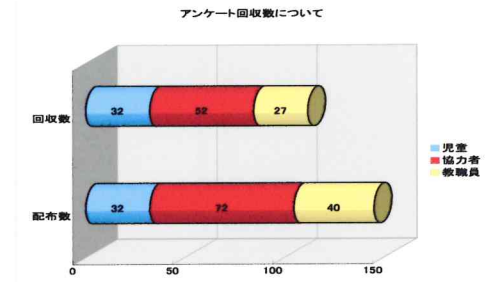
アンケート実施期間

2007年3月15日から3月28日までの14日間。「GO UP A LADDER OF DREAMS! 2006 プロジェクト」の最終展示日から実施したものです。

アンケート配布数と回収率

アンケートの配布数は144部、回収数は111部でした。回収率は総計80%、児童100%、協力者72%、教職員68%でした。児童へのアンケートは国語の時間(45分間)に実施及び回収とし、協力者へは児童を通しての手渡し回収とし、教職員へは学校長を通しての配布及び高田教諭への回収を行いました。教職員の方々へは、終業日にお時間を頂き

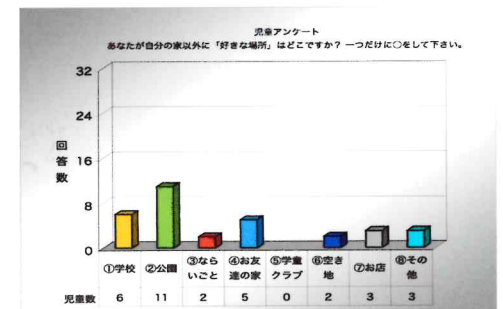
口頭にて直接お願いをすることができました。



子供たちの居場所

夢のはしごの授業は、子供たちの居場所づくりがテーマとなっています。居場所には、精神的な居場所と身体的な居場所の二つがあると考えます。今回のプロジェクトは両者の共存する居場所づくりをテーマとし、最終的には彼らの思い出として(記憶)として生き続ける限り残る、「居場所」づくり(心の拠り所)となれるよう努めました。その核におけるプロジェクトの内容が、「足掛かりの布」作成です。子供たちが、一枚の布で交わす大切な人とのコミュニケーション。それを、学校という場を介して出会えた仲間とともに一枚一枚「真つすぐに」貼っていきました。子供たちの居場所はどこにでも作れます。たった一枚の布を敷くだけで、そこには身体的な居場所ができます。それと共にその場所が、精神的な拠り所とならなければ意味がありません。そして、精神的な拠り所は一生消えない居場所となります。私自身にとっても、この作品が、作品を共にした人たちとの思い出が今の私の足掛かりとなり拠り所(励み)となっています。

さて、今回実施したプロジェクトに参加してくれた子供たちの生活の様子についてアンケート結果をもとに述べたいと思います。プロジェクト実施校区は住宅街であり子供たちは公園や学校で過ごしているようです。



さらに、子供たちは「あなたは家族の人と家でお話をしますか?」という質問に対し、「たくさん話す」と約81%の子供が答えている。また、「あなたは何人きょうだいですか?」という質問に対し、